

# 毒瓦斯発明官

——金博士シリーズ・5——

海野十三

青空文庫



蒸し暑い或る夜のこと、発明王金博士は、袖のながい白服に、  
 大きなヘルメットをかぶつて、飾窓をのぞきこんでいた。

南京路の雑沓は、今が真盛りであった。

金博士の視線は、さつきから、飾窓の小棚にのせられてある洋  
 酒の群像に釘づけになっている。いや、正しくいえば、その洋酒  
 の壇にぶら下げられた値段札の数字に釘づけになっていたという  
 方がいいだろう。

「あはは……」

博士がとつぜん声をあげた。これは決して博士が笑つたのではない。実は大歎息だいたんそくをしたのである、あははと……。およそ歎息というものは、感極かんきわまってその窮極に達すればあたかも笑声のような音を発するものである。嘘だと思つたら、読者は御自分でため験してみられるがよろしかろう。

「あはは、あの味のわるいウイスキーが一壘五百元げんとは、べら棒な値段じゃ。その昔、重慶相場じゅうけいそうばというのがあつたがその上をいく暴働ぼうかじゃ。同じ五百元でも、こつちのペパミントがいい。こいつを、氷の中に叩きこんで、きゅつきゅつとやると、この殺人的暑さは嵐にあつた毒瓦斯どくガスの如く逃げてしまうことじやろうが、

それにしても五百元とは高い、今のわしの財政ではなあ」

金博士は、このごろアルコールに不自由をしている上に、金にも困っていると見え、さてこそ極限歎息の次第と相成つたらしい。

丁度ちようどそのときであつた。金博士の頭を目がけて、一匹の近海がざ蟹みのようによく肥こえた大蜘蛛おおぐもが、長い糸をひいてするすると下りてきた。そして、もうすこしで、金博士のヘルメットにぶつかりそうになつて、ようよう下さがるのを停めた。おそるべき大蜘蛛だ。こんなやつに頸くびのあたりを喰いつかれ、生血いきちをちゅつちゅつ吸われたら、いかな頑固がんこ爺おやじの金博士であろうと、ひとたまりもなからうと思われた。

「もしもし金博士せんせい、おなつかしゅうございますなあ」

とつぜん、その大蜘蛛が金博士に言葉をかけたのだった。冗じょう

談だん じゃない……。

「うん」

博士の鼓膜こまくに、その声が入ったのか、博士は生返事なまへんじをした。

生返事をしただけで、彼はなおも飾窓の青いペパミントの値段札に全身の注意力を集めている。

「博士せんせいは、いつに変わらず御壮健ごそうけんで、おめでとうございます。

この前、金博士にお別れをしてから、もうかれこれ五六年になり  
ますなあ」

その化け物のような大蜘蛛は、しきりに金博士をなつかしむの

だった。これを横から眺めていると、博士も亦、蜘蛛の化け物じやないかという疑いが湧いてくる。そういえば「新青年」誌上  
にのっている金博士の顔は、蜘蛛の精じみた風貌をもっているよ。

閑話休題、金博士は、ようやく注意力の二割がたを、蜘蛛の  
に向けて割いた。

「おう、そういうお前は 鬻買石 じやな。お前はまだ生きてい  
たんか」

鬻買石といえ、あの有名なる抗日遷都將軍の名である。す  
ると鬻買石も、ついに人間の皮を被つては遷都する先がなくなつ  
て、遂に大蜘蛛に化けたのであるか。それとも、彼はオーストラ

リヤで戦車にのし烏賊いかられて絶命し、魂魄こんぱくなおもこの地球とどまに停とどまつて大蜘蛛と化したのであるか。

「あれ、金博士せんせい。醬はそう簡単に死にませんよ。しかしとにか、博士にお目にかかりたいばかりに、部下もつれずに单身、きびしい監視網かんしもうをくぐつて、ようやくここまで参りました。そしてとうとう博士に行き会いました、こんな嬉しいことはございせん。ふふふふ」

ふふふふは、醬の笑い声ではない。感激の泣き声である。泣き声がその極致に達すれば笑い声に似たる——ああもうその解説はよろしいか。なるほど前にも鳥渡ちよつと書きましたなあ。

「泣くなよ、醬。お前は小便しょうべん小僧こぞう時代から泣きべそじやつた



な。東に楠くすのきの泣き男あり、西に醬買石ありで、ともに泣きの一手ひとてで名をあげたものじゃ。で、わしに会いに来たというのでは、また何か大それた無心じやろう」

金博士は、やっぱり前まえ躑かみになつて、飾窓の中をのぞきこみながら口を動かした。博士は、まさか頭の上に忍びよつたる大蜘蛛と話をしていゝのだとは気がついていない様子に見えた。

「やあ、そのとおり、それが凶星ずぼしでございますよ。余よ——いや小生ようせいはこのたびぜひとも博士せんせいにお願いをして、毒瓦斯どくガスをマスタ―にいたしたいと決心しまして、そのことで遙々はるばる南海の孤島ことうからやつて参りました」

「毒瓦斯の研究か。そんなむずかしい金のかかるものは、お前の

柄がらじゃないぞ」

「いえ博士せんせい、そう仰おつしや有らないで、是非にお願いいたします。

今こそ孤島に小さくなっていますが、昔せきじつ日の太陽を呼び戻すには、猛毒瓦斯を發明し、その力によってやるのでないと全く見込みなしとの結論に達し、博士にお頼すがりに参りました。ぜひともこの醬あわを哀れと思おぼしめ召し……その代り、お礼の方はうんときばり、博士のお好みのものなれば、ウイスキーであろうとペパミントであろうと……」

「そうか。それは本当じゃな。男の言葉に二言にごんはないな——というて相手がお前じゃ仕様しようがないが……」

といいながら、博士は飾窓から顔を放して腰を真直まっすぐにのぼし

たものだから、さつきから垂れ下っていた大蜘蛛が一揺れ揺れると、博士の顔へぴしやと当った。さあたいへん、危いかな博士の一命！ 生かまたは死か？

## 2

……筆勢あまつて嚇し文句を連ねてはみたが、ここで金博士が、間髪を容れず、顔にあたった大蜘蛛を払いのけ、きやあとかすうとかいつてくれれば、作者も張合があるのであるが、当

の博士は、別に愕おどろきもなにもしない。甚はなはだ張合はいのない次第であつた。

愕うなかくどころか、博士は、矢庭やにわに手をのばして、その大蜘蛛の胴ど中をつかんだものである。

すると、ガラガラと、ラジオの雑音のようなものが聞えた。

金博士は、つかまえた大蜘蛛を口のところへ持つて行き、声を一段と低くして、

「おい醬買石、今すぐわしは、お前の居る屋上へ上つていくから、すこし待つて居てくれ。しかしお前も、こんどというこんどは余よ程懲ほどりた見え、屋上から、蜘蛛に見まがうような擬装ぎざうのマイクと高声器をつり下げて、わしに話しかけるなんて、中々機械化し

てきたじやないか、はははは」

「いや、ちとばかりソノ……」

「しかし、この無細工な蜘蛛を屋上からこの人通りの多い通りに吊り下ろすなんて、やっぱりお前は、垢ぬけあかのしないこと黠おびただしい。この次からは、もつといい智慧を働かすがいい」

褒ほめられたと思つた醬は、とたんにぺちやんこにやつつけられた。

さて、ここは屋上である。例の洋酒店のあるビルの屋上であつた。

のつそりと、非常梯子ひじょうばしこからあがつてきたのが金博士であつた。非常梯子の上り口に立って、うやうやしく拳手きよしゅの礼をして立つ

ている二人の白いターバンに黒眼鏡に太い髭ひげの印度人巡警！

脊の高い瘠やせた方が醬しょう買かい石せきで、脊が低く、ずんぐり肥つて

いる方が、醬が特選して連れてきた前途有望な瓦斯ガス師し長ちやう燻くん精せいで

あつた。二人は、まるで舷げん門もんから上つて来た司令官を迎えるよ

うに、極きわめて厳げんたる礼をもつて金博士に敬意を表ひようした。

博士は、几帳きちやう面めんに礼をかえずどころか、いきなり醬の瘠せた

肩をどんと叩いて、

「おい、ウイスキーにペパミントの約束、あれはまちがいないじ

やろうな。一本が五百元もするぜ。お前そんなに金を持つとるか」

と、無遠慮ぶえんりよな問いを発した。

「や、それはもう大丈夫です。御承知のとおり、昔からイギリス

と深い関係がありますものですから、武力こそ瘠せ細っています  
が、黄金であろうとダイヤモンドであろうとウイスキーであろう  
と、そんなものは、うんとストックがあります」

「ほ、ん、と、ですか」

「もちろん本当です。国破れて洋酒ありです。尤も早いところス  
トックにして置いたのですがね……しかし博士、毒瓦斯の方の  
ことですが……」

「うん、毒瓦斯なんて、他愛もないものじゃ。ウイスキーになる  
と、そうはいかん」

「いや博士、ウイスキーなんて浴びるほどあります。毒瓦斯の  
研究となると、そうはいかん」

「よろしい、バーター・システムで取引しよう。一体どんな毒瓦斯がいりよう入用か。フオスゲン、ピクリンサン、ジフェニルクロルアルシン、イペリット、カーボンモノキサイド、どれがほ欲しいかね」  
 下はじんこうひ人工灯の海、上はほしづきよ星月夜、そして屋上はまつくら真暗だった。  
 その真暗な屋上に立つて、金博士は大きく両手をひろげる。

「そんなものは、どれも欲しくありません」

「醬は人一倍大きな頭を左右に振る。」

「ほう、これじゃ気に入らんのか」

「せんせい博士。余——いや私の欲しいものは、そんなじゆうらい従来から知

れている毒瓦斯ではありません。そんな毒瓦斯は、きゆうちやくざい吸着剤

のかつせいたん活性炭と中和剤のソーダーせっかい曹達石灰とを通せばさえぎ遮られるし、ゴム



衣いゴム手袋てぶくろゴム靴くつで結けつ構こう避さけられます。そういう防毒手段ぼうどくしゅんのわかつている毒瓦斯どくわすは、今じやどこへ持つていつて撒まいても、効目ききめがありません。もつとよく効く、目新らしいものがないですなあ」

ナンキンむしたいじ

しんざい

南京虫退治

の新剤

を探しているようなことをいう。

博士は、別段困った顔もせずうなずに肯うなずき、

「わしのところには、どんなものでもあるよ。今お前のいった防毒面ぼうどくめんをどんどん通して、今までの防毒面ぼうどくめんじゃ役に立たない毒瓦斯どくわすがあるがこれはどうじゃ」

「それはいいですなあ。しかしそれは〇〇〇、〇〇〇〇〇〇じゃないのですか」

「ほう、それを知っているか。この種しゅのものはドイツと〇〇〇だけ

が持っているので、従来の防毒面ではまるで防ぐ力がない」

「しかし博士<sup>せんせい</sup>、それも駄目ですよ。なぜと行って、他の国には無いかもしれないが、ドイツなどには、その超毒瓦斯<sup>ちようどくガス</sup>を防ぐ仕掛をちゃんと持っている。そういう防ぐ手段のあるものは全然駄目です。私は、全然防ぐ用意のない毒瓦斯が欲しいのです。博士、ぜひお力をお貸しねがいたい」

醬は、熱心を面<sup>おもて</sup>にあらわしていった。

「ほうほう、だいぶん熱心じゃが、それもあるにはある。しかしこれを教えるには、大分高価<sup>こうか</sup>につくが、いいかね。まずウイスキーならダース入<sup>いり</sup>の函<sup>はこ</sup>単位<sup>たんい</sup>でないと取引が出来ないが……」

「ダース函でも何でも提供しますとも」

「ほい、お前にも似合わん、えらく気が大きいじやないかい」

「博士せんせい、わしの報復ほうふく成るかどうかという瀬戸際せとぎわなんです。あ

に真剣にならざるを得えんやです」

「そうか。なら、よろしい。ちよつとここに出してみようか」

「あ、待ってください。それはあぶない。ここで出されたんでは、私が死んでしまうじやないですか。そればかりは遠慮します」

「なにをうろたえとるか。出すといつても、本当の毒瓦斯を出すとはいつておらん。こういう毒瓦斯があるという話をしようかという意味でいったのじや」

「ああ、そうでしたか。やれやれ安心しました。とにかく博士せんせいと来たら、興きようが乗れば、敵と味方との区別なんかもう滅茶苦茶めちやくちやで、

科学の力を残<sup>ざん</sup>酷<sup>こく</sup>に發揮せられますからなあ。これまでに私は、博士のそのやり方で、ずいぶんにがい体験を<sup>へ</sup>経て来たもんです」

「醬よ、科学は残酷なものじゃよ。わしはそう思つとる。だから人間は出来るだけ早く科学を征服しなければならぬのじゃ。ドイツに於ては——」

「博士、ドイツの話はもう沢山です。それで私のお願いは、ここに立っている腹<sup>ふく</sup>心<sup>しん</sup>の部下で、新たに毒瓦斯發明官に任じました燻精を一週間だけお預けいたしますから、その期間にこの男に対し、新毒瓦斯研究の方針とか企画とか設備とか経費とか、ありとあらゆることを吹きこんでいたただきたい。私は、この男の帰還を待って、<sup>さつそく</sup>早速全世界覆<sup>ふく</sup>滅<sup>めつ</sup>の毒瓦斯を發明する鬼と化<sup>か</sup>して、全

力をあげ全財産を抛なげうって発明官と一緒にやるつもりです」

醬は、満天の星を吸いこもうとするのではないかと思われるよ  
うな大口をあいて、芝居気たつぷりに、途方もない重大決意を喚わめ  
き散らしたのであった。

「ええ加減にしろ。大言たいげんよりは、ウイスキーじゃ。ペパミント  
じゃ」

金博士が、醬に負けないような大きな声を出し、怒おこった蠅かまきり  
螂螂のような恰好かつこうで、拳固げんこで天をつきあげた。

博士の例の地下研究所の一室において、白い実験衣じっけんいを着た金博士と発明官くんせい燻精くんせいとが向きあっていた。

二人は、手に手にさかずき盃さかずきを持っている。

実験台の上には、いろんな形をした洋酒の壺が、所も狭く並んでいる。

博士は盃を唇のところへ持つて行き、黄色い液体を一口ぐつと飲んで、後はしばらく唇と舌とをぴちやぴちやいわせた。

「……ふーん、どうもおかしい。燻精、お前のもんでみる」

「はい」

燻精が盃を唇のところへ持つていった。

「はい、のみました。実にこたえられない、いい酒ですなあ」

「そうかね。わしには、それほどに感じないが……」

「せんせい博士、それは先生のお身体のぐあい工合ですよ。どこかどうかして  
いられるのです。糖とうぶん分が出ているとか、熱があるとかでしょう。

私には、十分うまいですよ。やつぱりイギリス製のウイスキーだ  
けありますねえ。これは英えい帝てい国こく盛さかんなりし時代の生き一いつ本ぽんです  
よ。間違いなしです」

「相当にうるさいね、君は」

「いや、酔よつぱら払はらったんです。これもこの酒の芳ほう醇じゆんなる故ゆえです。

そこで先生、酒の実験はこのくらいにして、お約束ですから、か

ねがねお願いしてありました毒瓦斯研究の指導を早速お始めい  
ただきたいのですが……」

「ふん、毒瓦斯研究の件か」

博士は何となく不機嫌ふきげんに、盃をがちゃんと台の上に置いて、

「では醬との契約に基き、正しく履行するであろう。神経瓦斯に  
ついて講義をする」

「あ、その神経瓦斯というものなら、既にドイツ軍がエベンエマ  
エル要塞戦ようさいせんに使ったということを聞いています。それはもう陳  
腐ちんぷな毒瓦斯で……」

「ドイツ軍が使ったという話のある神経瓦斯は、一時性いちじせいの神経  
麻痺瓦斯だ。それを嗅かいだベルギー兵は、恍惚こうこつとなつて、しば



らく何も彼もわからなくなった。もちろん、機関銃の引金ひきがねを引くことも忘れて、とろんとしておった。気がついたときには、傍そばにドイツ兵がいたというのだ。これは一時性の神経瓦斯だ。一時性では効力がうすい。これに対してわしが考えたのは、持久性じきゆうせいの神経瓦斯だ。これをちよつと嗅ぐと、まず短くても一年間は麻痺している。人によつては三年も五年もつづく。そうになると、その患者はもはや常人として責任ある任務をまかせて置けなくなる。どうだ、すごいだろう」

博士は、ようやく機嫌をとりかえした。

「それは、生理学からいうと、どんな作用をするのですか」

「つまり、脳細胞を電気分解し、その歪みゆがを持続させるのじやな」

「はあはあ、脳細胞を電解して歪みを持続させる……、それはおそろしいことだ。しかし電解させるといふのなら、それは怪力かいりよ線くせんの一種ではありませんか。毒瓦斯とはいえないでしょう」

燻精師長は、さすがに醬の信任があついただけに、するどく博士つっこに突込む。

「怪力線の如きものでは、ぴりぴりちかちかと来て、相手に知れるから、よろしくない。もつと緩かんまん慢なる麻痺性のものでないといけない。わしの作った神経瓦斯は、全然当人に自覚じかくがないような性質のものだ。臭しゆうき気はない、色もなく透明だ、もちろん味もない、刺戟しげきもない。もちろん極ごくく緩慢な麻痺作用を起すものだから、はじめから刺戟を殺してあるのだ。しかもその後いつまでた

つても当人は、瓦斯中毒になつていてという自覚が起らないのだ。つまり常じょうにん人と殆んど変りない精神状態におかれてあつて、しかも脳の或る部分が日と共に完全麻痺おちいに陥る。そうになると、たとえば、にこにこ笑つて人と話をしていながら、手に握つたナイフで相手の心臓の真上まうえをぐさりと刺すといったようなことを、一向昂こうふん奮もせず周章あわてもせず、平気でやる。まあ、そういう最も常人らしい狂人に変質させるのが、わしのいう持久性神経瓦斯の効果じゃ。どうじゃな。君もそういう方向のものを考えてみてはどうかな」

「す、すばらしいですなあ」

燻精師長は、盃を置いて、金博士に抱きついた。

「よせやい、氣持のわるい」

と、金博士は燻精を突き放し、

「さあ、もうそれだけのヒントを与えてやれば、お前は醬のころへ歸つて、早速さつそく發明研究を始めていいじやろう。さあさあ、とくとく醬の陣營へ戻れ」

「はい。では、引揚げましょう。永々ながながと御配慮ごはいりよありがとうございます。ございました」

「いやなに、たった十分間の講義だけじや。しかしあのウイスキーにペパミント百四十函は、授業料としては至極しごくやすいものじや」

「あれだけの夥おびただしい洋酒を捧ささげても、まだ先生の方が御損ごそんをなさいますか」

「それはそうじゃ。甚はなはだわしの方が損じゃ。帰つたら醬じょうに、そう  
 いつていたと伝えてくれ。しかし神聖なるバター・システムの  
 誓ちかいの手前、こつちでもぬかりなく按配あんばいしておいたと、あの醬  
 めにいつてくれ。さあ、引取るがよろしかろう」

「はいはい承知いたしました」

燻精しおどきには、何やら腑ふにおちかねる点もあつたが、今が引揚ひきあげの  
 潮時しおどきだと思つたので、博士をいい加減かげんにあしらつた。着換きかへえを  
 すますと彼は博士の前まへに出て恭々うやうやしく三拝九拝の礼を捧げ、踵きびす  
 をかえして、部屋へいを出でんとすれば、何思つたか金博士は、急いそに  
 うしろから呼び留よとめた。

「ああ、お帰りはこちらだ。この狭い廊下をずっといつて、やが

て突当ると、自動式の昇降機がある。それに乗つて一階へ出なさい。すると至極しごく交通に便なところへ出る」

と博士は、壁の釦ボタンを押し、壁に仕掛けてあつた秘密の潜り戸くぐを開いて、指した。

「ああそれはどうも。こつちに通路があるとは、全く存知ぞんじませんでした」

「こつちは特別の客だけしか通さないんだ。暫くしばら誰も通さなかつたから、顔に蜘蛛くもの巣がかかるかもしれない。手で払いのけながら、そろそろ歩いていきたまえ」

「いや、御親切に、ありがとう」

「どういたしました。はい、さようなら」

潜り戸を入った燻精師長のうしろで、ぱたんと扉ドアのしまる音がした。と同時に、博士が扉の向うで、さめざめと啜すすり泣くような声を聞いたと思つたが……。

## 4

南国の孤島において、醬しょう委員長は、あいかわらずの裸身はだかで、事を執とっていた。例の太い附つけ髭ひげはもう見えない。

そこへ燻精が戻ってきた。

「おお帰つてきたか。して、金博士から、すばらしいネタを引き出したか」

「はい、持久性じきゆうせいの神経瓦斯しんけいガス……」

「叱しツ。これ、声が高い！」

醬は、手の舞い足の踏むところを知らずといった喜び方であった。彼は、燻精の手をとらんばかりにして、彼を砂地すなじの上に立つ古城こじょうへ連れていった。

「さあ、ここが毒瓦斯発明院だ。看板も、余よが直々じきじき筆をふるつて書いておいた」

なるほど、あちこち崩くずれている城門に、毒瓦斯発明院の立て看板かかが懸かっていた。



「発明場は、すっかり用意をしておいたつもりじゃ。余自ら案内をしよう」

衛兵の敬礼をうけつつ、御両人は城内に入った。

「敵空軍の目をのがれるため、外観は出来るだけ荒れ果てたままにしておいた。しかし、あの煙突だけは、仕方なく建てた」

太い煙突が古城の上にぬつと首をつきだしている。

「あれは何ですか、あの煙突は」

「試作しやくの毒瓦斯が空高く飛び去るためだ」

「毒瓦斯は元来空気より重きをよしとするのでありますぞ。煙突から飛び立つような軽い毒瓦斯てえのはありません」

「いや、その重い毒瓦斯の逃げ路も作っておいた。向うに見える

太い鉄管てつかんは、海面かいめんすれすれまで下りている。重い毒瓦斯は、あの方へ排気はいきするんだ。風下はベンガル湾わんだ。海亀うみがめとインド鰐わにとが、ちかごろ身体の調子がへんだわいといいだすかもしれないが……」

醬が毒瓦斯發明院に対して肩の入れ方は、非常なものだった。

燻精は、彼の信賴むくに十分報いることが出来ようと自信たつぷりだった。

發明院長に燻精が就しゅう任にんして、百三十五名の發明官が、その下に仕事を始めることになった。まず設備を作るのに、三ヶ月かかった。それから燻精の講義が三ヶ月つづいた。

燻精の講義は全くすばらしかった。ときどき傍ぼう聴ちように来る醬し

ようかいせき  
買石は、その都度、頤あごの先をつねって恐きようえつ悦えつした。

「ふふふ、洋酒百四十函が、こんなにすばらしい効目ききめがあるうとは、すこし気の毒だったなあ」

燻精の指導ぶりは、目のさめるようであった。

げんどうき  
原動機は廻転し、ベルトはふるえ、軸シャフトは油をなめまわし、攪か

くはんき  
拌機はかきまわし、加熱かねつろ炉は赤く焰もえ、湯気ゆげは白く噴き出し、

えらい騒ぎが毎日のように続いた。

そうになると、醬は落ちついていられなくなつて、毎日のようにここに足を運んだ。

「おい燻精。まだ例の神経瓦斯は出来ないか。出来たら、余に早く見せてくれ」

「醬委員長よ。今度こそすばらしいものが出来ますぞ。瓦斯密度ガスみつど

が一・六〇〇〇四です。理想的な密度です。おどろいたでしょう」

「一・六〇〇〇四？ よくわからないねえ」

「精密なること、金博士の製品を凌駕りようがしています。かかる精密なる毒瓦斯は……」

「精密よりも、効目の方が大切だぞ」

「いや、この精密度なくして、あの忍耐力のつよい敵兵を斃たおすこ

とは出来ん。あ、また靈感が湧わいた。おおそうか、この毒瓦斯に

芳香ほうこうをつけるのだ。鰻うなぎのかば焼のような芳香をつけるのだ。無む

臭しゅう瓦斯うガスよりもこの方がいい。敵は鼻をくくんくんならして、この

瓦斯を余計よけいに吸い込むだろう。ああなんとというすばらしい着想点

だろう！ 鰻のかば焼の外ほかに焼き鳥の匂い、天ぷらの匂い、それからライスカレーの匂い等々とうとう、およそ敵兵のすきな香かおりを、この毒瓦斯につけてやろう。なんと醬委員長、すばらしい発明ではないですか」

「なるほど、積極的吸入性のある毒瓦斯じゃな」

醬は、にやりと笑って、燻精院長の手をしつかと握った。

この新製毒瓦斯が、予定の数量だけ出来上ったのは、その年の夏だった。

醬は燻たいどを帯たいどう同し、その毒瓦斯をもつて、突とつじよ如戦線に現れた。

そして朝から時間割を決め、午前七時には鰻の匂いすいみつとうのする神経瓦斯を、午前九時には水蜜桃すいみつとうの匂いすいみつとうのする神経瓦斯を、午前十

一時には、ライスカレーの匂いのする神経瓦斯をと、用意周到な順序で次々に瓦斯弾を、敵軍戦線へ向けて撃ちだしたのであった。その結果は、どうであつたか。

醬買石は、生命からがら、怒濤のような敵の重囲を切りぬけて、ビルマ・ルートへ逃げこむという騒ぎを演じた。

燻精の作った新製の毒瓦斯は、悉く無力であつた。いや、うまそうな匂いをもつて、反つて敵兵をふるい立たしめるといふ反効果があつたくらいであつた。燻精は、その戦場において捕虜となり、やがて病院に入れられた。

この顛末を聞いて、からからと笑つたのは余人ならぬ金博士であつた。

彼は唐箋とうせんをのべて、醬買石宛あてに手紙を書いた。

「謹呈きんてい。どうだ、持久性神経瓦斯の効目は。燻精は、わしのところから出ていくとき、特設の通路内で無味無臭無色無反応の持久性神経瓦斯を吸って戻ったのだ。だから、そちらの陣営に帰りついたところから彼はそろそろ、脳細胞の或る個所が変になりはじめたはずだ。彼の発明製造した毒瓦斯なんか、どうして信用がおけようぞ。おい醬よ、これに懲こりて、今後を慎つつしめよ」

なるほど、そうだったか。肝腎かんじんの毒瓦斯発明院長の燻精が、金博士のところを辞去じきよするとき、瓦斯通路を歩かされ、すっかり瓦斯患者とされてしまったのを、当人はもちろん醬も気がつかないかったのだ。

この手紙を受け取った醬は、たいへん口惜しがって、豆のような涙をぼろぼろ机の上におとしながら、博士に向つて抗議文を書いた。その要旨は、

「金博士よ。バーター・システムの取引を承知しておきながら、かの燻精を変質させて送りがえすとは、片手落ちも甚だしい。われに確乎かつこたる決意あり。しつかり説明文をよこされよ」

すると、金博士が折りがえし返事して曰く、

「醬よ。身から出た錆さびという諺ことわざを知らぬか。燻精を変質させて送りがえしたのは、お前がわしに、表のレツテルとはちがう変質インチキ酒しゆを贈つてよこしたからだ。つまり変質に対する変質の応お酬うしゅうである。わしは、バーター・システムの約を忠実に果たした



つもりである。質<sup>クオリテイ</sup>的<sup>ティヴ</sup>のバター・システムをね。あのインチキ・ウイスキーは悉く黄浦江<sup>こくほこう</sup>へ流してしまつたよ。以後お前とは絶<sup>ぜつ</sup>交<sup>こう</sup>じや”

と、博士は手紙の端<sup>はし</sup>に黒々と句<sup>く</sup>読<sup>とう</sup>点<sup>てん</sup>をうつたのであつた。



# 青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第10巻」三一書房

1991（平成3）年5月31日第1版第1刷発行

初出：「新青年」

1941（昭和16）年9月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力…tatsuki

校正…まよ

2005年5月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 毒瓦斯発明官

—金博士シリーズ・5—

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫  
著者 海野十三  
URL <http://www.aozora.gr.jp/>  
E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)  
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU  
URL <http://aozora.xisang.top/>  
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

### Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>